

武蔵野日曜集会

光なるロゴス

――ヨハネ伝第1章1～11節――

1994年1月23日

小池辰雄

主の愛したもう弟子 霊言 神無き世界 光なるロゴス 無者が本当の無限者 真の光 わ
が愛に居

【ヨハネ1:1～11】

1 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。2 この言は太初に神とともにあり、3 万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。4 之に生命あり、この生命は人の光なりき。5 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。6 神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。7 この人は証のために来り、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。8 彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。10 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11 かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。

●主の愛したもう弟子

ヨハネという人は十二使徒のうちで一番年下と言われています。それで彼の福音は第一世紀の終りの頃まで続いているわけです。ヤコブと一緒にゼベタイの子で漁夫です。ガラヤ湖でお魚を採る連中なんです。ヨハネ福音書とヨハネの手紙とヨハネの黙示録、この三つを残した大変な人です。学者によってはそれを肯定しない人も大分いますけれども、私はその通りだと思ってます。

彼は自分のことを「主の愛したもう弟子」と言っているところがある。13章23節、19章26節、20章2節以下、21章7節、20節等にそういう表現がされている。キリストはこのヨハネを非常に重要視していました。これはイエスにいつまでもついていた人で、最後にイエスが母親のマリヤを「よろしく頼むよ」と頼んだのは、このヨハネなんです。しかしながら、ヨハネという人は熱烈な性格の人で、「雷の子」とキリストに言われたように、非常に烈しいところがあったようです。マルコ伝3章17節に書いてあります。



ヨハネはキリストが十字架にかかる前に、祈った時に、ペテロと一緒にいた。そして、ペテロとヨハネはエルサレムに残って、エルサレム教会の二つの柱となったわけです。最後は、ヨハネは小アジア半島のエペソに居た。そして、離れ小島で黙示を受けた。そういう大事な使徒です。ヨハネ黙示録というのがそれです。

●霊言

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。」

これは素晴らしい言葉です。「はじめ」という字は文語訳では「太初」と書いてある。太初に言があった。実に素晴らしい言い方です。

「太初にロゴスがあった」

という。アレキサンドリアの哲学者のフィロンが「ロゴス」のことを言っていますが、しかし、それから思いついたというわけでもないでしょう。ギリシヤ哲学でもロゴスというのが出てくる。ロゴスというのは理性とか秩序とか、いろいろの意味をもっていますが、私はこの場合の「ロゴス」は正に「霊言^{れいげん}」だと思う。

「太初に霊言^{れいげん}があった」

という訳が明治の初めの頃の聖書にあった。そういう「霊言^{れいげん}がござった」という意味で、「ロゴス」といつてもこれは霊的な存在です。「ペルゾナ」なんです。英語でいうと「パーソン」、霊的人格体です。それが「初めにロゴスあり」ということ。

「ロゴスは神と偕にあり」

という。「プロス・トン・テオン」（神に向かってある）は神に対立して、神に向かっていたということ。このロゴスというのは神との対話のできる霊的人格なんです。それは暗にキリストを指しているわけです。

「アブラハムより我は先にありしなり」

とキリストは言われたでしょ。「偕^{とも}に」というのは、並んでいるのではない。対立している。対話ができる。対話的な在り方です。我々はみなお話しするときに、相対^{あひ}している。

「初めに霊言的な存在、霊的人格がいた」

ということが「初めにロゴスあり」ということです。「言」と書いてあるけれども単なるいわゆる言葉ではない。非常に神秘的な霊的な存在なんです。

「ロゴスは神に対して、向かつて在った」

という。「偕に」という訳し方はよくない。「神に対して在った」ということです。そして、そのロゴスは、

「言は神なりき」

とはつきり言っている。神的な、霊的な存在であった。神と同質なんです。この第1節は凄い。



「太初にロゴスあり、ロゴスは神に対してあつた、ロゴスは神であつた。²この言は太初に神とともにあり、

この「ともに」の訳し方は全くよくない。「神に対してあつた、向かつていた」ということ。喧嘩ではないですよ、この対するというのは。一緒に並んでいたのではない。

「このロゴスは太初に神に対してあつた」

ということ。ドイツ語では「バイ・ゴット」と訳しているが、バイもうまくない。「プロス・トン・テオン」をこんな訳し方をしたらしょうがない。これが案外分かっていない。いわゆる学者の言うことなんか聞かない方がいい。「グラマトス」というのが「学者」という字ですけども、それはダメなんだ。

「ロゴスは正に神であつた。このロゴスは太初に神に対してあつた」

と。だから、このロゴスはキリストであることが暗にその言葉の中に含まれている。

³万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

正に神ですから、創造の力をもっている。実に不思議な言葉です、この始めの方の言葉は。これは霊的人格ですから、

⁴之に生命あり、この生命は人の光なりき。

と。我々が光というものを知るのは全く太陽によります。ゲエテは死ぬまぎわに「もつと光を！」と言って亡くなった。ゲエテは非常に光を慕った人です。光は、もちろん我々は太陽から受けとつて、そして光というものを知ったわけです。ゲエテは、

「自分はキリストと太陽の前には無条件に平伏す」

と、死ぬ二週間前に言っている。ゲエテという人はやはり偉大だ。

●神無き世界

日本の詩人は神無き世界で、アンダー・ゴッドでない世界はダメなんだ。日本の民主主義なんてものもそうだ。リンカーンは、

「アメリカの政府は神の下において（アンダー・ゴッド）、民の民によるところの民のための政治である」

と言っている。

昨日は或る学校のPTA新年会に招かれて行つた。とにかくぎやかだった。けれども、いわゆるにぎやかさは、私はさびしい。やはりそこに神を讃えるところの調べがないから。神無き世界だから。

神無き世界はダメだ。日本の政治もそうだ。アメリカの大統領が就任するときには、聖書に手を置いて誓う。何といつても、そういうところは違う。日本の政治家は――西郷南洲は「敬天愛人」と言つたが――「敬天」がない。まだ南洲は偉い。中国人は、絶対界の



存在を「天」という言葉で表している。自然界でも天地がある。霊界の天です。ダンテにしろ、ゲーテにしろ、みなそういう宗教的な土台をもっている。宗教的な土台のないものは結局ダメなんです。仏教でもいいよ、仏教の世界は悟りの世界だけれども。如来というのは何か不思議な存在だから。宇宙霊という。

霊的存在は、人間は相対的な言葉では表現しませんが、それはみな暗号なんです。問題は魂が本当にその霊的なものによって活かされているか、それが事実となっているか、それだけが問題です。説明の世界ではない。これが、そのロゴスなんです。霊的人格体です。

●光なるロゴス

「霊言(レイゴン)」

という訳は素晴らしい。実在している。霊言がござったと。

「ロゴス存在は太初に神に対して在った」

ということですよ。

³ 万(よろづ)の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

と。創造の力をもっているから、

「いかなるものもこのロゴスによつて、ロゴス実在によつて成らないものはない」

という。このロゴスはもの凄い霊的な生命をもっている。

⁴ 之に生命あり、この生命は人の光なりき。

「生命が光である」とは素晴らしい言葉です。これも霊的な光です。高僧や何かの後ろに光背が、後ろの光が描かれているのは、実際にあれば光っているんです。だから描いたんだ。想像ではない。

私の育った無教会というのは、そういった霊的な事態を、神秘的な消息を嫌った。非常に観念なわけです。さっぱりダメだ。だから、私は無教会から出てしまった。内村先生は始めは少しその光の世界、霊的な世界が多少あったけれども、自分で消してしまった。聖書の研究になってしまった。ダメだよ、内村先生が「研究、研究」なんて言うから。研究というものは二次的な意味しかもっていない。「聖書研究会」なんてダメなんだ、身体からだで読まなくては。

やはり、大詩人ゲーテはからだで読んでいた人です。聖書を読んでいて、そこから神の光が、力が、生命が感じられるような読み方をしなければダメです。意味ではない。意味の世界ではない。響きと霊的な視覚の世界です。

とにかく、太陽の光がなければどうにもならない。太陽の光は我々に生命を与えている。大変なものだ。ゲーテは、

「太陽とキリストの前には無条件に頭を下げる」



といった。やはりさすがは違うよ。

日本にそんなことを言った文学者がいるかというんだ。徳富蘆花もまだちょっと手前だった。蘇峰はダメ。夏目漱石もダメ。夏目漱石という人は人間味は豊かな人だけれども。藤村は少しそれに触れています。芥川もかなりあったけれども、とうとう自殺なんかしてしまった。猪牛はちょっと高慢だな。真に偉大な人はむしろ平伏しているひとです。高慢はサタンだからね。

5 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。

「悟らざりき」と、おもしろい言い方を、人格的な言い方をしている。自分の暗さを本当に知れば、悟るんですけれども、この暗さを知らない暗さというものは困ったものだ。中世の神秘家の中に「輝ける暗黒」という言葉がある。旧約聖書のミカ書にも似たような言葉がある。

「我が敵人よ我につききて喜ぶなかれ、我仆るれば興あがる。幽暗に居ればエホ

バ我的光となりたもう。」(ミカ7:8)

エホバの光があるから暗きも一向差し支えないという。

女の方は第二の国民の母親ですから、非常に大事な使命をもっていらいしやる。歴史は女性がつくっている。だから、ゲーテが彼の詩の一番終りに、

「永遠に女性的なるものが

我々を引き上げていく」

という句を書いた。あれは最後の句です。ダンテもベアトリーチェに引っぱられて歩いていったようなものだ。

ロゴスは光であり、生命である。「言」という語に躓かないでくださいよ。大変な内容をもった「ロゴス」です。日本語で「言」なんて訳すからおかしくなってしまう。これは、

「太初にロゴスあり」

と、はじめから「ロゴス」を「言」と訳さない方がよかった。「言あり」なんて訳したらダメなんだ。日本語というのは非常に表現がたくさんあるものだから、ある一つの表現でいうと、その豊かな内容がかえって表されなくなってしまう。

「太初にロゴスあり、ロゴスは神に対して在った」

と、「ロゴス」を「言」と訳さない方がよかった。

●無者が本当の無限者

マタイ福音書は言葉の世界が非常に豊かです。マルコは行為の世界が非常に前面にでている。ルカは心の世界。最後のヨハネは霊の世界です。ヨハネ福音書というのは非常に霊的なんです。共観福音書というのはマタイ、マルコ、ルカ福音書です。同じ観かたをしている。立場がだいたい似ている。ところが、ヨハネ伝はその共観福音書とちがう。ヨハネ



伝は共観福音書に入らない。それだけ非常に霊的なものです。

⁵ 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。

暗黒は光を受けとらない。暗黒は自分の暗黒を知らないからダメなんです。

⁶ 神より遣された人いであり、その名をヨハネという。⁷ この人は証のために来り、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。⁸ 彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

証には二通りある。こういうように、ケタが違うから、これは仕方がない。けれども、身証、身体でもって証しする。自分自身がそれに成らせられる。私たちはキリストの証人と言うときには、自分がキリストと一つになって、

「キリストの生命は、光は、愛はかくの如きものである」

ということを身体で証明する、身証する。そういう証がむしろ本当の証です。証するためには、自分がそれと同質にならなければ、証ができない。ヨハネはキリストに非常に同化された人です。でなければ、黙示録なんか書けやしない。

イエス・キリスト自身が、

「自分は何もできない、何も言えない」

とヨハネ伝の中で言っている。それで、キリストは神の証人なんです。ということは、神さまを全的に受けとったから。ヨハネ伝5章30節を見てもらいなさい。

「我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審きは正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。」（ヨハネ5・30）

「私は神さまから聞くままにやっているんだ。聖意を求めているだけで、自分の意見なんてものはないんだ」

と、これはキリストの言葉ですよ。

「イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。』（ヨハネ5・19）」

と。無者なんだ。だから、私はキリストのことを無者と言っている。無者が本当の無限者に、限り無き人になる。無即無限無量というのはそのことです。神さまを受けとるから無限無量になる。自分の方に何か在ったのでは、受けとれない。無の実存とはそのことです。そういうことをキリスト教界で言った人がないようだね。案外なものだ。

その無も、私は悟って無になったのではない。キリストから賜った無ですから。キリストが、「全部、私は引き受けた。お前は空っぽでいいぞ。空っぽにしてやったぞ」

と言ってくださる。罪びとでありながら、罪無きひとにしてもらった。それが無の世界です。そうすると、聖霊がやってくる。



「十字架と聖霊は離すことができない」

と申し上げているのはそのことです。十字架で無とされ、聖霊で無限無量とされる。だから十字架・聖霊は離すことができない関係です。「十字架、十字架」とばかり言っていて、一向に聖霊を受けとらないご連中は観念十字架です。パウロは、

「我はキリストと共に十字架せられたり。もはや我生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生きたもうなり」

と言った。霊的なキリストの生命がきたという、あのパウロのガラテヤ書2章20節の言葉は素晴らしい言葉です。

●^{まこと}眞の光

賀川先生は福音を実証した人だから、私は無教会の先生たちよりも賀川先生を本当に尊敬しています。しかし、霊の世界になると、この賀川先生はちよつとまだ足りない。

私は今、大きな詩を書いている。恐らく世界でも一番大きな詩になるでしょうね。なにしろ、私はエネルギーがきてしょうがないんだ。使命を果たすまでは、私は地上を去らないから烈々たる力が上からくるから仕方がない。パウロが言っているとおり「止むを得ざるなり」です。自分で頑張っているのも何でもない。私はちよつとも頑張りません。自分で頑張ったら、くたびれてしまう。力は上からくる。よく「頑張れ」と言うが、私は「頑張りません。圧倒されて生きています」と言う。

暗黒が暗黒自身を知らないものだから、光が暗黒に照つても暗黒はこれが分からない、という。面白い言い方をしている。クリスチャンもそうなんです。

「自分は徹底的な罪びとである」

という自覚がない人は、

「まだ自分は取り柄がある」

なんて思っているうちは、本当の福音の力の世界に入れない。取り柄なんかありっこない。太陽の光の前に、ロウソクの光が何になるか、電灯が何になるか。

イギリスの詩人のブレイクという人もなかなか神秘的な消息の分かる人だった。イギリスのブレイク、ブラウニング。フランスのユゴー。ロシアのトルストイ、ドストエフスキー。イタリヤのダンテ、アッシジのフランチェスコ。それに並ぶような人が日本にはいない。霊の世界が希薄なものだから。漱石さんもおしい。彼自身が嘆いている。才能が豊かくらいではダメなんです。私みたいな極めて才能の無い者が逆にそういう世界に入れられる。

藤井先生の校正のお手伝いしていた時に、

「小池君はそのうちに凄いものを書くよ」

と言った。先生がなぜあんなことを言ったかね。藤井先生というのは非常に詩人的な人でした。43歳で仆れてしまつて、惜しかった。『羔羊の婚姻』という偉大な詩を書いて、未完



成で終わってしまった。

9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。

なかなか、ヨハネという人の表現は凄い。いきなり「キリスト」と言わないんだ。「もろもろの人をてらす真の光」と言っている。太陽の光だってウソではないけれども、この「真の光」というのは本当の霊的な光ということです。

「人を照らす真の光が世にやってきた」

という。「世」というのは罪の世のことです。罪の世界のことを「世」という。

10 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。

表現が非常に神秘的だ。パウロは理屈が多いけれども、ヨハネは理屈でない。非常に神秘的な断言的な言い方をしている。ヨハネの方がパウロよりも一枚上だね。

大なる文豪は非常に表現が素朴なんです。ゲーテとシラーを比較すると分かる。ゲーテというのは大変なひとだ。ドイツで第一人者は誰かというところ、文句なしにゲーテです。ゲーテの、ある土台はルッターがつくっている。精神界ではルッターが土台をつくった人です。ルッターとゲーテがなかったら、ドイツはないと言っているくらいだ。『レ・ミゼラブル』を書いたフランスのビクトル・ユゴーは大変な人です。最大文学の一つと言ってもいい。ドストエフスキーは暗い。トルストイの方が私は好きだ。トルストイは親しめる人だ。あなたの方とはかく第一流のものを読みなさいよ。第一流のものその他は読む必要はない。ダンテの『神曲』は読まなくてはな。ユゴーの『レ・ミゼラブル』、トルストイの『復活』。イギリスではミルトン、ブラウニング、ブレイク。書かれたものでは、哲学ではなく、文学です。文学が本当に真理を渾然とあらわす。

●わが愛に居れ

9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。

太陽の光どころではない、「これは本当の光だ」と。

「我は真の葡萄の樹、汝らは枝なり」

とキリスト自身が言っているでしょ。

「葡萄の木はあるけれども、自分が本当の葡萄の木だよ。そこらにある葡萄の木は私のシンボルに過ぎないんだ。こっちは本当の葡萄の木だ」

ということ。ああいう言葉は非常にもろい。

「我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。」

(ヨハネ15・1～2)

「この福音の世界、この私の真の葡萄の木から枝になれば、身証せよ。我に居れ、私につながっていないさ」



ということです。

「我に居れ、さらば我なんぢらに居らん」

このヨハネ伝15章のキリストの言葉は素晴らしい。

「父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ」

「愛に居る」というのは「信ずる」よりもっと強い言い方です。「私を信ぜよ」ではない。

「私の愛につながっている」

ということですよ。

¹⁰彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。

世はこの創造的な彼を知らない。

¹¹かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。

彼はユダヤの国にやって来たけれども、ユダヤ民族はこれを受けなかった。旧約の「モーセ、モーセ」とばかり言って、キリストを受けとらない。「新興宗教だ」なんて思って、キリストを迫害して、とうとう十字架にかけてしまった。ユダヤ人は、偉大な大チャンピオンであるキリストを十字架に架けてしまった。

12節からは、本当のクリスチャンはこれを受けとった。それはなにもユダヤ民族に限らない。ユダヤ人の中で改宗したのはパウロです。パウロはパリサイの権化だったけれども、これが今度は復活のキリストにひっくり返された、

「何ぞ、我を迫害するかっ！」

と。それでパウロはひっくり返されて、キリストの第一の僕になった。パウロの回身というのは凄い変化だ。心の回心ではなく、身体が全部ひっくり返った回身です。存在的にひっくり返った。何でも全存在的でなかったらダメです、単に心だけでは。

「復活」というのは、ただ息を吹き返したということではない。霊体として新しく現れたことです。

「血気の体あり、霊の体あり」

と、コリント前書15章でパウロが言っているでしょ。あの霊体なんだ。

「⁴⁴血気の体にて播かれ、霊の体に甦えらせられん。血気の体ある如く、また

霊の体あり。⁴⁵録して始の人アダムは、活ける者となれりとあるが如し。而

して終のアダムは、生命を与うる霊となれり。」(コリント前15・44～45)

「終のアダム」とはキリストのことです。パウロというのはキリストにひっくり返されて、本当に福音を伝えた人だ。新約聖書の大事なものはヨハネとパウロだ、選びの器だ。

新約聖書を読んでいて、

「もう聖書は楽しくてやめられない」

という気持ちにならなくてはダメです。意味の世界ではないから。力がきて、光がきてしょうがない、生命がきてしょうがない。圧倒されながら読む。男の人でも女の人でも。

